

国家珍宝帳の書

川上, 貴子

<https://hdl.handle.net/2324/7329393>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏名	川上 貴子			
論文名	国家珍宝帳の書			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	井手 誠之輔
	副査	九州大学	准教授	石井 祐子
	副査	九州大学	准教授	藤井 倫明
	副査	九州大学	名誉教授	坂上 康俊

論文審査の結果の要旨

本論文は、聖武太上天皇の七七忌にあたり光明皇太后によって東大寺盧舎那仏に献納された品々の目録で、東大寺献物帳の中の筆頭にあげられる国家珍宝帳1巻について、そこに採用された文字の書体の形成過程を明らかにするための詳細な比較検討を行った実証的研究である。序章と終章の他、六章において展開される議論は、国家珍宝帳の書体の特色を再検討する前半部の各章と、玄宗期の公的文書に見られる新書体の受容をめぐる様相とその背景を探る後半部の各章に大別される。

先行研究では、王羲之の系統にあった初唐の欧陽詢の書体を基本とする説のほか、隋・智永の千字文を介した王羲之の書体の反映とみなす説、盛唐の玄宗朝における顔真卿の書体の採用説など、複数の説が併行してきたが、前半部では、国家珍宝帳の願文に使用される429文字全ての書体を網羅的に検証した上で、国家珍宝帳には先行諸説の指摘と関係する三つの規範的な書体が混在していることをはじめて明白に指摘している。さらに先行諸説を修正し、混在する三つの規範的な書体は、①欧陽詢を参照した奈良朝写経の書体、②楷書中心の智永の千字文だけでなく行草書を含めた幅広い王羲之書の学習結果の反映、③顔真卿の書を含む玄宗期の公的文書で使用される新書体として整理され、総じて「国家珍宝帳の特色は、中国を中心とする東アジア世界の中で、正統性を担う書体を規範として採用しつつも、一方で時代の相前後する複数の規範的な書体が同一平面上に展開し、全体なかで抑揚のある美しい表情を見せていること」にあるとする著者の新見解を揺るぎないものとしている。

後半部では、玄宗期の新書体が受容され展開する具体的な様相として、まず国家珍宝帳を除く四つの献物帳では種々葉帳の位署書と屏風花氈等帳の外題に、また法隆寺献物帳においても新書体を確認する。さらに奈良朝写経においては、大聖武に見られる重ね書きにその受容の初発的状况を認め、紫微中台管下の写経事業による光明皇太后発願一切経（朱印経）に広く採用されていることに注目し、天平勝宝6年（754）帰朝の遣唐使によって玄宗期の新書体がもたらされ、東アジア世界における日本の政治的・文化的立場を意識していた光明皇太后や藤原仲麻呂の意向を反映しながら、皇后宮職系の紫微中台管下の写経所を中心に展開していた事実を明らかにしている。

本論文は、国家珍宝帳の文字に採用された書体の分析を徹底し比較検討する中から、八世紀の奈良朝における唐文化受容のあり方の一端を比類のない精度で解明するだけでなく、書体の意図的採用という観点から、国家的文書の書体には国の在り方を表象する機能があるとする新視点を具現させている。本論文において展開される議論は、奈良時代にとどまらず、広く美術史や文化史、歴史学等、関連する諸分野に対して多大な成果とともに書体研究の重要性を強く喚起する研究として高く評価されよう。本編の他、附編の七〇〇頁にわたる国家珍宝帳・法隆寺献物帳文字分類一覧表（部

首別)は、本論文の書体分析が、精緻にかつ正確に実践されていることを証すばかりでなく、奈良時代の書体研究の基礎資料としても高く評価される。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)を授与されるのに十分な能力を持つことを認める。